武蔵野日曜集会

生命のパン
――ヨハネ伝第６章22～37節――

１９９４年10月２日
小池辰雄

徴の奥の世界を見る　永遠の生命にまで至る糧　信即行　キリストの中に投身　「我を食らえ」
相対的現実と霊的現実の二重構造　力が来てしょうがない　キリストと生命的に一つになる

【ヨハネ６・22～37】

22明くる日、海のかなたに立てる群衆は、一艘のほかに船なく、又イエスは弟子たちと共に乗りたまわず、弟子等のみ出でゆきしを見たり。23（時にテベリヤより数艘の船、主の謝して人々にパンを食せ給いし処の近くに来る）24ここに群衆はイエスも居給わず、弟子たちも居らぬを見てその船に乗り、イエスを尋ねてカペナウムに往けり。25遂に海の彼方にてイエスに遇いて言う『ラビ、何時ここに来り給いしか』26イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らが我を尋ぬるは、徴を見し故ならでパンを食いて飽きたる故なり。27朽つる糧のためならで永遠の生命にまで至る糧のために働け。これは人の子の汝らに与えんと為るものなり、父なる神は印して彼を証し給いたるに因る』28ここに彼ら言う『われら神の業を行わんには何をなすべきか』29イエス答えて言いたもう『神の業はその遣し給える者を信ずる是れなり』30彼ら言う『さらば我らが見て汝を信ぜんために、何の徴をなすか、何を行うか。31我らの先祖は荒野にてマナを食えり、録して「天よりパンを彼らに与えて食わしめたり」と云えるが如し』32イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、モーセは天よりのパンを汝らに与えしにあらず、然れど我が父は天よりのパンを与えたもう。33神のパンは天より降りて生命を世に与うるものなり』34彼等いう『主よ、そのパンを常に与えよ』35イエス言い給う『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信ずる者はいつまでも渇くことなからん。36然れど汝らは我を見てなお信ぜず、我さきに之を告げたり。37父の我に賜うものは皆われに来らん、我にきたる者は、我これを退けず。

●徴の奥の世界を見る

22明くる日、海のかなたに立てる群衆は、一艘のほかに船なく、又イエスは

弟子たちと共に乗りたまわず、弟子等のみ出でゆきしを見たり。

「海のかなた」というのは、東から見た「かなた」で、西の岸の方です。「海」とはもちろんガリラヤ湖です。

23 **（時にテベリヤより数艘の船、主の謝して人々にパンを食せ給いし処の近くに来る）**

これは多分、渡し船で行ったわけです。

24 **ここに群衆はイエスも居給わず、弟子たちも居らぬを見てその船に乗り、イエスを尋ねてカペナウムに往けり。**

「カペナウム」は北の方にある。

25 **遂に海の彼方にてイエスに遇いて言う『ラビ、何時ここに来り給いしか』**

カペナウムにはもちろん会堂があるわけです。キリストがよくお話をなさった所です。

26 **イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らが我を尋ぬるは、徴を見し故ならでパンを食いて飽きたる故なり。**

ここのところは普通のパンの話です。キリストの奇蹟的な徴を見たわけです。キリストはいくらでも徴はなさった。病を癒したり、唖者をもの言うようにさせたり。

「パンを食らったために来たなんて、とんでもない」

というわけです。キリストがいろいろな奇蹟的な徴をなさったのは、その徴の現象にとらわれたらダメなんです。徴は、徴の奥の世界を見るための現象であって、徴そのものを問題にしたらダメです。そういう徴という現象を起こすことができるキリストには、その奥に凄いものがある。

浅間山の噴煙を見て、その奥の方に凄い火があるということと同じです。炎は、火があるから炎なんです。その炎でなくて、火の世界を、奥の世界を徴によって察知しなくてはいけないわけです。ただ現象に大体はみなとらわれてしまう。病が治ったとか、何がどうなったとか。それで、有難いと言って、ただ感謝する。それではダメなんで、その奥の世界の本ものを見て、その感謝はただ感謝でなくて、それに連ならなくてはいかん。

●永遠の生命にまで至る糧

27 **朽つる糧のためならで永遠の生命にまで至る糧のために働け。**

これは霊的な糧のことです。「朽つる糧」というのは肉的な糧です。我々は毎日、「朽つる糧」を食べていますから。肉体は朽ちる糧を食べて生きてますけれども、しかし、魂は朽ちない糧を食べなければいけない。朽ちない糧はこの聖書の言がもっている。キリストは、

「わが言は霊なり、生命なり」

と言われた。聖書の言は霊なり生命なりで、意味ではない。聖書を読んで、その霊的な生命を受けとらなかったなら、実は聖書は読んでいることにならない。意味がどんなに分か

ったってダメなんです、頭で分かっていたのでは。だから、私はキリスト教という言い方は嫌いなんです。教えではない。キリスト道です。身体で、足で感ずるところの世界です。頭で理解する世界ではない。

「永遠の生命にまで至る糧のために働け」

とある。けれども、本当に働けるためには、永遠の生命をいただいていないとダメなんです。永遠の生命の実体はキリストそのものです。キリストを信じたってダメです。

これは人の子の汝らに与えんと為るものなり、父なる神は印して彼を証し給いたるに因る』

キリストがいろいろな奇蹟をなさったのは、その奇蹟の奥の世界、霊的生命の世界を与えるためです。

●信即行

28**ここに彼ら言う『われら神の業を行わんには何をなすべきか』**

神さまが要求なさるところの業、それを行うためにはどうしたらいいかと。「神の業」というのは神の求めたもう業ということです。

29**イエス答えて言いたもう『神の業はその遣し給える者を信ずる是れなり』**

神の求めたもうところの業は――何かすることではない――「遣し給える者」を、キリストを信ずることが業だという。これは面白い言葉です。普通は「信仰と行為」といって、分けて考える。昔は、

「行為は問題にしない。とにかく信仰だけだ」

と言って、「信仰、信仰」と私たちは言われてきた。

「ちゃんとした信仰を持たなくてはいかん。行為はどうでもいい。大事なのは信仰だ」

と、お題目みたいになっていた。ところが、キリストは、

「聞いて行わざる者は神の国に入ることができない」

と言っておられる。行為です。キリストは自分の言を皆に語っているが、それを聞いて、行わなければ神の国に入れない。天国の門の所に行って、

「お前は何をしたか」

と聞かれる。

「これこれを致しました」

「それでは、入ってよろしい」

「キリストを信じました」

「ダメだ」

なんてなわけです。

「行わなければダメだ」

と、ミルトンがあるところで書いてます。

「さぁ、大変だ。信仰、信仰というから、信仰があればいいかと思っていたら、行わなければいけない。信仰と行為と両方を一生懸命で言っているのはカトリックだ。プロテスタントは信仰ばかり言うが、カトリックは行為のことも言っているからカトリックの方が本当だ」

なんて。ある意味ではそうですよ。ところが、実は信仰と行為を二分と考えてはダメです。信即行なんです。信ずることが即、行為である。キリストを信ずるというのはキリストと一つにならなければ、本当の信ずるではない。

「われキリストのうちに在り。キリストわがうちに在り」

という一如の関係です。パウロの信仰がそれです。その一如の世界にいくと、行為が自然に出てくる。行為せざるを得ない。現象せざるを得ない。火は炎を発せざるを得ない。そういうことです。

●キリストの中に投身

だから、普通「信仰、信仰」なんていうのは本当の信仰をもっていないわけです。本当の信仰があれば――普通は、「しんこう」の「こう」の字は仰という字を書くけれども、本当は信じ仰いでいたってダメなんだ、「信行」と書かなければ。信即行です。これが信行（しんこう）なんです。信ずるということは、キリストの中に自分を投げ入れなければ、本当の信ずるではない。自分をキリストの中に投げ入れるというのは行為ですから。全身的な行為です。

「われキリストのうちに」

と言うときには、自分を投げ入れなければ、キリストの中に入れない。

「さぁ、来なさい」

とキリストは待っているんだ。だから、全身でもって投入する、投身する、からだを投げ入れる。キリストの中に投身する。これは、冥想と祈りの世界でやらなければダメですよ。全身が熱くなる。私なんかはすぐ異言が出そうになる。ここに居ても異言が出そうになって、私は異言を抑えていますけれども。言葉で語っているのがまだるっこくなる。聖書は説明なんかしたってしょうがないんだ。説明の世界ではないですから。告白の世界です。聖書講義なんか、講義なんかしたってばからしい。講義して、意味が分かって何になるか。

皆さんも、黙って聖書を読んでいて、その中に自分が入るような投入する読み方をしていると、身体が熱くなる。ヘタすると異言が出てくる。そういうのが、本当に聖書の言葉の中に自分を入れている読み方です。生命の言だから、生命が伝わってくるからね。

「神の業はその遣し給える者を信ずる是れなり」

という言葉があっても、これをみな観念的に受けとってしまっている。観念的に受けとっ

たらダメなんです。
「神の求めたもうところの業は、キリストを受けとることだ」
ということです。「信ずる」なんていう言葉はダメです。「信ずる」という言葉は非常に躓きの言葉だ。
「私はキリストを信じてます」
なんて、これは観念でダメなんだ。
「キリストを受けとりました」
と言わなくては。

●「我を食らえ」

キリストはここで言ってらっしゃることは、
「私を食べろ。私は生命のパンだから、私を食べなさい」
ということです。キリストはここでは「食べろ」と仰らないけれども、
「我は生命のパンなり」
と言うときには、これはパンだから食べなくていけない。
「我を食べよ」
とは書いてないけれども、食べなくては。パンは眺めていたってしょうがない。食べなければしょうがないんだ。そのように、キリストは霊の糧だから、キリストを食べなくては。そうすると、
「我はキリストのうちに在り。キリストはわがうちに在り」
と。それがキリストを食べているということです。生命のパンだから。本当は、
「我を食らえ」
ということだ。
断食は、我慢することを訓練するために断食するのではない。我々が食べるパンの代わりにキリストを食べる。キリストを食べるために断食する。水は飲んでいいけれども、キリストを食べる。そういうキリストを食べる祈りをやる。そうしたら、霊的な力がくる。空(す)いていたおなかが空かなくなる。キリストの霊的な生命が入ってくるから、水だけでたくさんだ。始めはお腹が空いて食べようと思ったのが、食べる必要がなくなってしまう。たまには、有志たちとどこかへ出かけて行って、そういう集会をするといい。
私は語りながら、そういう現実に入っていますが、あなた方は聞きながら、そういう現実に入ってくださいよ。
「そうですか？」
ではないよ。
「その通りです！」

と、そういうような聞き方をしていただきたい。

●相対的現実と霊的現実の二重構造

30彼ら言う『さらば我らが見て汝を信ぜんために、何の徴をなすか、何を行うか。31我らの先祖は荒野にてマナを食えり、録して「天よりパンを彼らに与えて食わしめたり」と云えるが如し』

出エジプト記の16章に出ている。

32イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、モーセは天よりのパンを汝らに与えしにあらず、然れど我が父は天よりのパンを与えたもう。

さぁ、こんなことを言ったものだから、「何だ？」と思って聞いているわけだ。

33神のパンは天より降りて生命を世に与うるものなり』34彼等いう『主よ、そのパンを常に与えよ』

ハハハ、全然分かってない。

35イエス言い給う『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信ずる者はいつまでも渇くことなからん。

と。これは、

「私こそは生命のパンだ。私に来たる者は飢えず、私を信受する者はいつまでも渇くことはない」

ということ。「渇くことなからん」という訳し方はダメです。

「渇くことなし」

です。本当の信仰の世界は現実の、現在形か現在完了形で受けとらなければダメです。

「渇くことがないだろう、渇くことがあるかもしれない」

なんて、そんな読み方をしていたらダメです。どうも、この聖書はまだ訳が弱い。あなた方はこんな弱い訳を見ていて、承知していたらダメだよ。私は本当の現実に入らないと、生きてられないんです、本当の霊的な現実に入らないと。私は相対的現実と霊的な現実の二重構造になっているんだ。今、私は詩の世界でそういう戦いをしているわけです。

それで、キリストは、

「私は生命のパンだぞ。私に来る者は飢えない。私を受けとる者はいつまでも渇かない。渇くことがない不思議な水だ。このパンは永遠の生命だぞ」

とはっきり言われた。

36然れど汝らは我を見てなお信ぜず、我さきに之を告げたり。

ダメじゃないかと。

37父の我に賜うものは皆われに来らん、我にきたる者は、我これを退けず。

神さまがちゃんと見ていらっしゃる。神の選びに入らないとね。

「では、私は神さまに選ばれているだろうか、いないだろうか」
と、そんなことを考える必要はなにもない。みな一人びとりその人らしく顧みられている。

●力が来てしょうがない

聖書でキリストの言葉や行為を見て、その言葉の中に、その行為の中に自分を投げ入れて、そして、キリストと同じ、同質の言葉、同質の行為がおのずから発するようになる。そうしたら、それが本当にキリストを食べていることになる。キリストのパンにあずかっていることになる。そうでなければ、キリストのパンにあずかっていることにならない。

自分がキリストと同質のことを、同じ種類の同じ質のことを言いまた為さなければ。キリストの中に入れば、同質のことが語りまた為せるようになってくる。それが証し人ということです。それが証しているということです。意味の理解だの、説明だの、そんな世界ではない。大体のクリスチャンはみな、意味の理解や説明くらいでもって聖書を読んだと思っているが、冗談じゃない。

「力が来てしょうがない、光が来てしょうがない、生命が来てしょうがない」
と、そういう已(や)むに已まれざるところの事態です。西郷南洲が、
「已むを得ずして為す、これが真の至誠である」
と言っている。「已むを得ず」というのは、自分でやるまいと思っても自然にせざるを得なくなってくる。止(や)むを得ずして為す。英語で、
"no other can I do"（別な具合には自分はできない）
という言葉がある。
「これしかできない、それが本当の至誠の世界だ」
という。
「私は勉強せざるを得ない」
と、これが本当の勉強の仕方です。
「歌わざるを得ない」
と、これが本当の歌い方です。何でも、ざるを得ない世界。
「こうしようか、ああしようか」
という選ぶ世界ではない。
「別にしようがありません、これしかありません」
ということ。それが本当の実存、在り方、生き方です。キリストはそのようにして神さまから遣わされて、どうしようもなくて神さまの手足になって動いていた。

●キリストと生命的に一つになる

「我は生命のパンなり」

という。祈り入って、キリストという生命のパンと一つになって、何かしらんけれども、非常に生命的になって疲れを知らない、ご飯は要らないというようなことになる。ご飯を食べている時は、キリストを食べているようなつもりで食べたらいい。だから、

「信ずる」

という言葉ではなくて、

「食べろ」

ということです。生命のパンを信じたってしょうがない。生命のパンは食べなくては。これは霊的な祈りの世界で自分をキリストの中に投げ入れると、キリストと生命的に一つになるから、それがキリストという生命を食べたことになる。

霊界に居られたキリストが今度は相対界に、

「言は肉となった」

と、ヨハネ伝の最初に書いてある。霊的な霊言が肉となった。だから、キリストという実体を食べなくてはダメです。霊的生命にあずからなくてはダメです。「信ずる」という言葉はもう要らん。我々は、信ずるなんていう言葉は要らないんだ。食べなくては。食べればいい。食べるほうがよっぽどいい。

「我を食らえ、我を飲め」

ということ。これは楽しいですよ。そして、自然に讃美歌を歌いたくなる。あなた方、自然に讃美歌を歌っていますか。

「詩篇」というのは本当は詩篇ではない。あれは歌篇なんだ。ユダヤ人はあれをみな歌っている。「詩篇」という訳はよくない。あれは「歌篇」だ。「雅歌書」というのがあるでしょ、あれは歌なんだ。詩篇なんていう訳は間違いだ、せめても詩歌と言わなくては。

キリストという生命のパンを、信ずるのではなくて、食べる。信ずるという言葉はダメです、食べなくては。一つ生命にならなくては。一如です。キリストと一つになる。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

という現実に入らなければ、本当のキリスト者ではない。本当のキリスト者でないのがいかに大勢いるかというわけだな。

人間は誰だって躓いたり転んだりしますよ。けれども、その本質はどこにあるかということが大事です。

「私はキリストと一つです。躓いたり転んだりしますけれども、私はキリストと一つです。逃げようとしたって、逃げられません。キリストがとっ捕まえます」

と、これがはっきり告白できなければね。我々の側の在り方のいかんに関わらず、キリストは捕まえて離さない。これが本当の恵の世界です。

「恩恵（めぐみ）と賜物（たまもの）」

とパウロが言っているでしょ。「賜物」というのはいろいろな、それからいただくところの、

その人の技や才能のことですけれども、「恩恵（めぐみ）」というのはキリストそのものです。キリストそのものが恵みの主体なんです。この恵みは誰にもやってくる。賜物はその人によっていろいろだ。

コリント前書12章も大事なところだ。時々、パウロの書翰を読んでくださいよ。パウロの書翰は大事ですからね、ローマ書は言うまでもなく。あなた方は聖書を本当に楽しく読んでいますか。

「あっ、ここは」

と自分で感じたところにはサイドラインを引いておかなければ。まっ白な聖書ではダメですよ。私の聖書を見せてあげようか、旧約から新約まで全部ラインがひっぱってある。大変だよ。ところによっては頁が切れてしまっている。自分の聖書を見ると、どこにラインが引っ張ってあるか大体分かる。そして、

「聖書は私が書いた本です」

と、あなた方一人びとりがそう言えるようにならなくては。それくらい親しまなくては。感激した所は必ずラインを引っ張りなさいよ。聖書が自分の生命の一部分になる。

とにかく、楽しく勇ましくやってください。私はあなた方と一緒にどこまでも行きますから。